

私を育てた  
あの時代、あの出会い

第19回

# 苦しくても生徒と向き合い続ける 初任校でその大切さを学んだ

神奈川県 横浜市立霧が丘小中学校 校長 酒井 徹 SAKAI TOHRU

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、酒井校長が語る。

とにかく学校に長くいたい  
その意志に賛同した同僚

私が教員になった頃は、全国的に学校が荒れていた時期でした。初任校でも指導の難しさに疲弊し、全教員15、16人のうち、毎年5、6人が希望して異動する状況でした。多くの先生が在任期間が3年程と短く、教員と生徒・保護者との信頼関係が築けないために、状況が改善されないことは新米の私の目にも明らかでした。ならば、自分とはかく学校に長くいようと思ったのです。「苦しいからといって放棄したら教育にはなら

ない」。その決意を同期の岩本博光先生に打ち明けると、「自分もそう思っていた」と賛同してくれました。

私たちはまず校内を常にきれいに保つことにしました。ペンキやモルタルを常備し、汚れや穴はすぐに直していったのです。また、悪いことは悪いと、生徒に毅然と注意しました。何度同じことをされても、何度反抗されてもです。ただ一方で、生徒を追い込み過ぎないことも意識しました。開き直られたら、教員のどんな声も生徒には届きません。実際、とことん追及し、白黒をはっきりさせようとしたところ、「もうどうなっ



さかい・とおる 専門教科は理科。大学の卒業研究で実験結果に納得できず、大学院に進学して研究を続行。修士課程修了後、教員となる。横浜市立寛政中学校・本郷中学校では、通算12年間、生徒指導主事を務める。

- 1982 (昭和57)  
横浜市立寛政中学校に新採で赴任。橋本隆校長、岩本博光先生と出会う。赴任中最後の4年間は生徒指導主事を務める
- 1992 (平成4)  
横浜市立本郷中学校に赴任。うち8年間は生徒指導主事を務める
- 2001 (平成13)  
横浜市教育委員会指導部で児童・生徒指導担当指導主事に着任
- 2006 (平成18)  
横浜市立錦台中学校に副校長として赴任。2008年同校の校長に
- 2011 (平成23)  
横浜市教育委員会指導部で人権教育・児童生徒課長に着任
- 2014 (平成26)  
横浜市立小中一貫校霧が丘小中学校に校長として赴任

てもいい！進学も諦めたし、俺は好きにやる！」とすさんでしまった生徒がいました。そうした経験から、疑わしい生徒からも言い訳は十分に聞き、逃げ道だけは残しておこうと意識しました。その結果、生徒自身の内省で歯止めが掛かったと思われるケースが増え、生徒と教員の無用な衝突がなくなりました。

教科指導にも力を入れました。当時の橋本隆校長は「苦しい時こそ授業を充実しよう」と言われ、私に「生徒の注目を集めたい時の自分なりの『キュー（合図）』を持とう」と助言してくれました。理科担当の私は、ここぞという場面では色が変わるものや音が出るものなどを見せ、生徒を授業に引き付けるように努力しました。

そのように、一人ひとりの教員が指導の工夫を積み重ねていくうちに、教員間の仲間意識が高まり、学校に残る教員も増えていきました。保護者や卒業生から「兄ちゃんが世話になった先生の言うことは間違いない」「あの先生は信じられる人だ」と弟妹や後輩に伝わるようにもなりました。そうして、10年間居続けた私が異動する頃には、生徒たちは落ち着き、学力も大きく向上していきました。

## 「ナナメの関係」が子どもたちの成長を促す

その後、再び生徒指導が難しい学校に赴任した時のことです。問題を起こした生徒が、校長の私に「家族への不満」「学習への自信の無さ」を打ち明けてくれました。学習面はいくらでも協力できると個別補習を提案すると、早朝7時半から校長室に来て、数学に取り組み始めました。

問題が解けた際に私が「すごいな」と褒めていると、いい笑顔を返してくれました。すかさず「やれば出来るのだから、授業にもしっかり出るんだぞ」と言うと、いつもの頑なな態度はなく、素直にうなずいたので、分からないことが分かった時は誰でもうれいもの。しかも、普段接する機会の少ない校長から認められたことで、生徒は心を開き、受け止められたのでしよう。厳しいだけでは思いは伝わりません。誰が注意するか、いつ伝えるかが重要なのだとつくづく感じました。

今年度、私は小中一貫校の校長に着任しました。小中の文化の違いはありますが、子どもも教員も交流し、互いの理解を深めながら、合同の活

## 「生徒の心に響かせるには伝えるタイミングも大切」



動を少しずつ増やしています。「学校探検」では、小学1年生が中学校の授業を見学しました。生徒は小学生の視線を感じ、中学生としての自覚を持って授業に取り組んでいました。合同の集会では、生徒会・児童会の発案で一緒にレクリエーションをしました。退場時、小学生とハイタッチをし、笑顔で「ありがとう」と言われた生徒はとてうれしそうでした。また、小中の特別支援学級の児童生徒と一緒に行った芋掘りでは、中学

校生活に自信のなかった生徒が、芋のある場所を教えてあげた小学生に大喜びされ、以降、積極的に参加するようになりました。このように、いつもとちよつと違う「ナナメの関係」が、子どもの成長を大きく促すのです。「良いと思ったことはどんどん提案し、無理のないようにやっつけていこう」。本校の合言葉です。小学校の授業も毎日見て回り、自ら溶け込んでいくことで、先生方を支えていきたいと思えます。